

〈小説〉佳作

青いジャージ

法学部 法律学科 2年 高橋 舞人

一月半ば、今日は朝から雪が降っていた。起きると異様な寒さに驚き、それから窓の外を降る雪に少し胸が躍った。雪を見て嬉しくなるのは中学三年生になっても変わらないのだなと思った。

それほどの寒さの中、今朝は体育館で朝礼があった。ストーブの熱が行き渡らない体育館で生徒たちは寒さを嘆きながら話を聞いていた。そんなに寒いのなら指定のジャージの長ズボンを履けばいいのにと考えた。俺は履いている。ただ、べつたりとした青のジャージはお世辞にも洒落ているとは言えないのも確かだった。

「カツアゲなんてする人、今でもいるんだね」隣の席で健が言った。

朝礼の内容は、うちの生徒が隣の中学の生徒からカツアゲの被害を受けた、というものだった。一時間目が始まる前の教室で、それぞれが朝礼での件について誰が犯人だとか被害者だとか言葉を交わしている。

「今でもって、昔もいたような言い方だな」俺は言った。

「昔はいたらしいよ。見たことはないけどさ」

「どっちにしろ、カツアゲなんてするやつはろくでもない。俺だったら走って逃げる」

「爽太はそれができるかもしれないけど。まあ、くだらないのは間違いないね」

健は一時間目の英語の準備をしていた。そして必要なものを机に出し終えると、ぼうつと虚空を見つめるようにしていた。

「そういう奴らつてさ」自分の言葉を確かめるように、ゆっくりと健は切り出した。

「カツアゲ犯？」

「うん。どういう気持ちで、どういう考えでそんなことしてるんだろ」

「バカだから、考えなんて無いんだろ」

俺の即答が気に入らなかった、というわけではないのだろうけど、健はどこか腑に落ちない顔をしていた。

「先生がさ、お前たちがやったことが、この先ずっと残る可能性があることを考えて行動しろ、って言ってたよね」健は言った。

「言ってたな」カツアゲをしてきたのは隣の中学校の生徒という話だったのだが、それはまるで俺た

ちに説教をするような口調だったため、反感を覚える生徒もいたように見えた。

「カツアゲをした奴らはさ、そういうこと考えてなかったのかな。将来への影響とか」

そうだと、とは、次は言わないでおく。

「悪いことかどうかは、分かっているのかな」

「分かっていると、救いようがないだろう」

「でも、やったんだよね」

「らしいな」

多分、健は何か言いたいことがあるわけではないのだろう。何か考えたいことがあるだけなのだ。健にはそういう癖があった。自分のことや目の前のこと、時には世界の反対側のことまで、考えて、答えなんて滅多に出なくとも、その苦しみを血液として体中に巡らせる。それは優しさでもあり、賢さでもあり、難儀な弱点でもある俺は思う。

そして俺はいつも健のそんな姿に羨望を抱き、手を貸したくなり、時には付き合いきれずにただ眺めていた。

教室に英語担当の女性教師が入ってきて、談笑の声が止んでいく。

隣を見ると、健は単語帳を開いていた。

授業中、英文法の問題を答える役目として健が指された。静かに椅子を引いて、健が立ち上がる。

健は、頭が良い。これは旧友としての臆盾でもなんでもない、言わば数値的な事実だった。志望校は県でもトップの公立高校で、合格の可能性は十分にあると模試の判定や担任が太鼓判を押していた。

だから、学校の授業で指されるくらい健にとっては何でもないはずだった。

ただ、今日はやけに解答に時間をかけた末に、誤答していた。先生があれこれと解説をしている。健が間違えるのは珍しかった。教室の誰も健を見たりはしなかったが、気になるところを我慢しているようにも、見えた。

「珍しいな」座る健に俺はこっそりと言った。

「うん」健の声はあっさりとしていた。

「これは雪でも降るな」

「今朝から降ってるよ」

「今の、もう一度説明できる？」

教室が沈黙した。気が付くと、先生は俺の方を向いていた。「説明、聞いてた？」

「すみません」

耳の辺りが熱を帯びるのが分かる。健がこちらを見て、静かに笑った。

朝からの降雪は止むことなく、学校からの帰り

道は真っ白でよく滑った。雪にはしゃぐのも程々に、俺と健は帰宅した。放課後には塾がある。

家に帰って塾に向かう準備をしていると、健からメールが来た。思ったよりも雪が積もっていたから、今日は歩いて行かないかということだった。駅のすぐ近くにある集団塾には、いつも二人とも自転車で向かっていた。ただ、雨の日などは歩いて行ったり、バスで向かったりもした。

一六時過ぎに家を出て健と合流した。俺たちの家は、隣同士とまでは行かないが、互いに一分とかからず行き来できる距離にあった。俺たちが互いの母親の腹の中にいる頃から両親同士の付き合いはあったらしく、言うまでもなくその記憶は微塵もないが、その事実が俺たちに感慨のようなものをもたらしてくれていることは確かだった。

いつものように小さな公園の前で待っていた健に手を挙げると、コンビニに行かないかと誘われた。「いいよ。何か買うの？」俺は訊ねた。

「ココアが買いたいんだ」

「いいな、それ。今日は絶好のココア日和だ」

「大袈裟だよ」健は笑った。

俺たちは雪が舞う中を駅の方へと向かい歩き出した。

塾の向かい側にあるコンビニで俺たちは熱く、らいに温められたペットボトルのココアを買い、塾へと歩いた。

その日は、というか、その日も塾では県立高校

入試の対策が行われた。過去問題から抜粋された問題を解き、解説を聞き、次へ繋げるためのポイントを提示された。

今日の健は珍しく上の空といった様子だった。問題は時間内に解いていたし、隣で見ている限り正答率も悪くないようだった。学校とは違い、この塾では講師が生徒を指すような形式はとらないため、上の空に見えた健が講師に指され、今朝の俺のような失態を晒す心配はない。ノートも、基本的にはとっているように見えた。そもそも、上の空に見えるだけで、その実ほとんどもなく集中している可能性もある。

チャイムが鳴り授業が終わった。

「帰ろうぜ」俺は荷物をリュックに入れながら、隣の健に言った。健はペン回しをしながら斜め下の辺りを、まるで前の椅子に視線を縫い付けられたかのように見えていた。

もう一度呼びかけようとしたところで、よし帰ろうかと健が言った。健のココアはちつとも減っていないくて、もうとつくと冷めているだろうなと思った。

塾を出ると、雪は音もなく止んでいた。

「公園に寄ってかない？」健が言った。俺は行こうと答えた。

公園は塾を出て大通りを渡り、広く大きい坂道を駅から遠ざかるように登っていくとそのほとんど天辺にあった。周りにはマンションやコンビニ

もあった。公園に行く前にそのコンビ二に寄り、俺はまたココアを買った。健も冷めたココアは家で飲むと言って、俺と一緒に新しいものを買った。

公園に着くと、健はブランコに座ろうと言った。

「でも、結構濡れてるぜ」目の前の、雪が積もったブランコを眺めながら俺は言った。「まあでも、ジャージだからいいか」

俺たちは、休日以外は学校の外でもジャージを着ていることがほとんどだった。デザイン性の欠片もない青いジャージだが、そのダサさに目を瞑りながら、むしろそのダサさを直視しながら、それでも着るしかない、諦めるように着る。もちろん、他の生徒がどう思っているかは知らない。

健は鞆からタオルを取り出し、軽く手で雪を払った後そのタオルでブランコを拭いた。

「用意いいな」感心した俺の声は少し大きかった。

「何かに使うと思ったんだ。あと、爽太が持っていないとも思ってた」そう言って、健は鞆からもう一枚のタオルを取り出した。

「用意、いいな」

一段と大きい俺の声を聞いて、健は笑いながらブランコを拭いていた。

水気がなくなってもブランコは冷たかった。軽く漕ぐと寂しげなのか喧しいのか分からない音が鳴るのが久しくて心地よかった。冬の夜の冷気が頬や手の平を刺す。

ブランコの持ち手を肘で挟み、買ったばかりの

ココアを両手で包んでいた。健もそうしていた。交互に、時々重なるリズムで、二人とも気の抜けたようにブランコを漕ぐ。

「あと一か月だよ」健が言った。

ココアを飲みながら、うん、とだけ返した。鼻から甘い香りが抜けた。

受験のことだとはもちろんすぐに分かった。もうすぐ出願が始まり、やがて試験を迎える。学校でも塾でも、夜の公園でも、そのことが俺たちの頭を完全に離れ、また、完全に放してくれることはない。

しばらく、ブランコや時折公園の脇を通る自動車の音を聞いていると、健がブランコを漕ぐのを止めた。

「志望校、変えようと思ってるんだ」

健がそう言った時、俺は固まるように息を止めてしまった。ブランコも、止まる。

「別に爽太は関係ないよ？ 自分で決めたんだ」

頷くでもなく声を出すでもなく、俺はとても曖昧な反応をした。そんな俺を見ながら健は面白そうに笑い、ココアを一口飲んだ。俺も一口飲んだ。胸の内側から熱が染み渡り、それは頭にも辿り着く。「どこにするかは決めたの？」俺は訊ねた。

「うん」健は公立高校の名前を挙げた。それは県内の公立高校では、あくまで数値的な話だが、偏差値で見ればつまりは二番目に高い高校だった。

「それがどれくらいの違いになるのか分からないけど」健は言って、ココアを飲んだ。

「俺は」少し、空いた。「健がいいと思うなら、いいと思う」

「いいと思ってるよ、もちろん。自分で決めたんだから」

その声はとてもさっぱりしていて、意思が固いようにも興味がないようにも聞こえた。

俺は不自然に黙ってしまった。本当だよ、と健が笑った。

一〇月に部活を引退した俺は、一月の模試の結果を受け、志望校を変更していた。そのことを健に言うかはあまり迷わなかった。隠す理由もないし、なんとなく伝えたと、健もなんとなく返事をした。

ただ、それが健のモチベーションに影響してはいないだろうかと、受験が近づくにつれて考えるようになっていった。健は県トップの高校を目指していて、模試の判定では合格が十分に狙えると出ていたが、それで安心することはまずなかったはずだ。一方で俺は、志望校を変更したことが何よりも大きく合格はほとんど間違いないという状況だった。

そのことで健に気を遣ってはいない。健が気を遣うこともない。お互いにそれは望んでいないし、お互いがそれを望まないことは、誰よりも二人が分かっていたからだ。

しかし、健の口からある種の決定的な言葉を聞くと、俺の顔はいやに強張った。それは健から見ても明らかだったのだろう。

「自分で考えて、自分で決めたんだ。そうじゃないと意味がないから。ちよっと考えすぎたのかもしれないけど」

「何をそんなに考えたんだよ。だって、健なら、別に志望校を変えなくても」

「受かるかどうかだけじゃないんだ。いや、もちろん、合否は大事だし、合格する可能性も気にするけど。それでいうと、やっぱり不安はあったからね」

「それはそうだよな」

「それはそうだよ」健がため息を吐くと、それは公園の煌々とした灯りに照らされて白く輝いた。

「でも、それだけじゃなくてさ。こう、考えて、変えてみたくなったんだ」

「なにを？」

「自分を」

あまりにも真剣な顔で言うものだから俺は吹き出してしまった。笑うなよ、と健が笑っている。

「それは冗談半分だけだよ」

「半分ねえ」俺は茶化す。

「自分で考えて、判断できているのか、自信がなくなってきたんだ。志望校さ、親と相談して決めたんだ。これ、爽太に話したっけ？」

「聞いたことある」

「受けるって強制されたわけじゃないけどさ。俺なら目指せるって、それは学校でも塾でも言われたよ。それで流されたつもりはなかったけれど、でも受けようとはつきり思ったことはなかった。例えば、入学してからやりたいことなんて、一つも出

てこない。面接だったら、これ、ダメだよな」

「不合格です」俺は判子を押すような動きをした。

「そうですよね、やっぱり」

二人で笑って、ココアを飲んだ。

「だから、考えてみたんだ。もしかしたら、志望校を変えなくてもよかったのかもしれない。でも、あれこれ考えだすと、案外楽しいんだよね。やっぱり、自分で決めたことって、実はそれほど多くなかったんだって思ったよ」

健はどこか恥ずかしそうに、それでもはつきりと言った。新しく志望校にした高校には文芸部があり、それが決め手になったのと言った。確かに健は本を読むのが好きだった。

「あとさ」勿体ぶってから、健は言った。

「そこの方が、家から断然近いんだ。これは面接では話せないかな？」

「不合格です」俺はまた判子を押した。

「帰る前にさ、あっち寄ってみない？」

「あっち？」俺は首を傾げた。健が指す方向に何があったか、考えても見当がつかない。

ブランコを降りて空になったココアのペットボトルを捨て、公園を出た。駅からさらに遠ざかるように歩いていく。

「今朝、話があった場所だよ」悪戯そうに健が言う。あまり見たことのない横顔だった。心なしか歩調がいつもより早い。

「今朝って？ ああ、カツアゲの話か？」

「そう。その現場に行ってみようよ」

「行って、どうするんだよ」

「犯人がいたら、捕まえる」

「本気で言ってるのか？」

「本気だよ」その横顔は笑いをこらえることが精いっぱいと言わんばかりに強張っていた。

それから、俺たちはどちらからともなく走り出した。

「この辺だと思っけどな」立ち止まって俺は言った。健はすっかり肩で息をしていた。

見慣れない道を、俺たちはただ歩いた。夜の雪の積もった道は何か特別なことの予兆のようで、俺たちの胸を弾ませた。

しかし、カツアゲ犯らしき人物には遭遇しなかった。

「俺たちにビビってるんだな」

「そういえば、この辺は家も多いし、目撃者とかいそうだよな。目立つことをしたら、見つかると思うんだけど」健が言った。

「出てきたら」俺は足元の雪を丸めて、駐車場のフェンスに投げつけた。「こうしてやる」

「いいね、それ」

健も雪を丸めて、でたらめに投げた。周りには何台か車もあったが、そんなもの見えていないかのように思い切り振りかぶって投げていた。散っていく雪が街灯の光を反射して輝く。

俺たちはそうして雪玉を扉やら電柱やらに投げ

つけながら進んだ。時々お互いに投げ合った。それは顔にも当たったし、青いジャージは濡れたり泥に汚れたりした。一投一投が俺たちを高揚させ、ついには二人とも涙を浮かべて笑いだしていた。声を上げて笑いながら蛇行し、足元の雪を丸めて投げた。

前方に赤いポストが立っているのを見つけると、もう俺の体は自然に動いていた。そのポストがカツアゲ犯なのではないかと自分でも錯覚するくらいだった。

「撃て、撃て！」

赤いポストに白い雪玉がぶつかり、べしゃっと潰れる。

健は笑いながら、ほとんど言葉にならない声で、やめろ、と言っていたが、すぐに静かになった。

笑いすぎて死んだのかと思ひ隣を見ると、健は雪だか氷だか判別がつかない塊を拾い上げて、げらげら笑いながらふらついていた。そしてそのままポストの目の前まで行くと、いくぞと叫んだ。ように聞こえた。

何をするのかと思えば、健はその雪だか氷だかの塊をポストの口から中へ入れようとした。俺は慌てて駆け寄り、健をポストから引き剥がそうとした。やめろ、と何度か発声したつもりだった。しかし、混乱とおかしさで舌は回らず力も入らなかった。狂ったように笑いながら、とにかく健の体を揺らした。健も狂ったように笑いながらポストにその塊を入れようとしていた。ずっと何かを

言っていたが、それは一度も分からなかった。

「なにやってんだ、おい」

怒鳴り声が聞こえた。振り返ると、すぐそこに男が立っていた。リードに繋がれた犬がこちらに向かつて吠えている。

俺と健は転がるように、実際に滑って転びながら走って逃げだした。お前らどこの生徒だ、と背中に飛んできた声に答える余裕はない。動揺すらも腹の奥をくすぐって、俺たちは笑うことと走ることしかできなくなっていた。

犬が追ってきている気がしてずっと走った。振り返ると男も犬も見えなくなっていた。そしてどこだか分からない路地に入っていた。

「あっちだよ、あっち。導きの星だ」健が言った。

指している方を見ると、オリオン座や薄い雲が浮かぶ冬の夜空に、一際明るい、赤い星があった。それは他のどの星よりもずっと近くに、それこそ手が届きそうなくらいすぐ近くに浮かんできた。

「レッドスターだ」俺はそう言って笑った。

「ザ、だよ。ザ・レッドスターだ」健も笑った。頭が良い健は冠詞にも敏感だ。

犬の鳴き声が聞こえて、俺たちはその赤い星に向かつて、怯えつつも笑いながら走った。目も耳も口も引く張るような冷たい風が気持ちよかった。

翌日も朝礼があった。内容は昨日の朝礼で伝えられたカツアゲ被害についてだった。掻い摘んで言うと、カツアゲの被害に遭ったという話はうち

の生徒がでっ上がった嘘だということだった。ざわつく体育館で昨日と同じ教育指導課の先生が怒りを隠そうともせずマイクで拡散していた。今回の件の卑劣さや学校を振り回す行為への嚴重な注意を口にしていたが、とにかく言いたいことは「ふざけるな」だったように思う。

朝礼から戻ると教室はやはり賑やかだった。嘘をついた生徒やその動機について、特定なのか推測なのかは知らないが、時に満面の笑みで、時には極端に苦い顔をして、男女問わず話していた。あっちの中学は不良ばかりで頭も悪いから本当にカツアゲが起きてもおかしくはない、なんていう声も聞こえてきた。

俺と健もその例に漏れず今朝の話題についてあれこれ話していた。ただ、それは生徒の特定だとか罪状はなんだとか、そういったことについてはなかった。いつものように、健が考え出したのだ。考えるというよりは、それは気になってしまっ

てもう無視できないというような状態に近い。「どうしてそんな嘘ついたんだろう」ぼんやりと前を見ながら健は言った。

「先生を困らせたかったのかな。それとも、あっちの中学の人に恨みでもあったのかな」

俺は返すべき言葉を探して、窓の外に目をやった。昨日あれだけ降った雪は溶けきらずにあちこちに残っていて、所々では泥の混じった氷になっていた。もう趣なんてなくなっていた。それはただ、今が冬であることを確かめさせるように町に

あった。

おはようと言いながら英語の先生が入室してきた。隣を見ると、健は単語帳を見ていた。

英語の授業が始まってからも俺は時々窓の外を眺めていた。演習や解説の合間に、昨日はあの辺りにいたかどうか、ポストはあそこかどうか、そんなことを思っていた。

昨夜、犬から逃げ切った俺たちは赤い星を頼りに歩き、けれど途中で知っている道に出たため、そこからは普段の帰路に就いた。家に着くと、帰りが遅いこととジャージが異様なまでに汚れていることで母に叱られた。それから風呂に入り携帯を見ると、健からメールが来ていた。『全然怒られなかった』という内容だった。俺もそうだった、と返信をした。そして英単語をいくつか見て寝た。あの突発的な高揚の残りが胸にあったが、疲れが勝ってぐっすりと眠れた。

そして今朝になると、その高揚は記憶になっていた。言葉にしてもしょうがないとどこかで思っていたからか、俺も健も昨夜のことは口にはしなかった。それは、もう雪に興味を示していないのと似ていた。

そんなことを考えながら窓の外を眺めていて、俺はあることに気付いた。

先生が黒板を向いたところを見計らって、健の肩を小さく叩き、窓の外、遠くに立つクレール車を指さした。

なに、と声に出さずに口だけ動かし健は眉をしかめた。あれ、と俺は小さな声で言い、またクレール車を指してみせた。動物園で動物を眺めているようでおかしかった。

「昨日のさ、俺がそう言ったところで健も気付いたらしかった。」

「レッドスターだよ、あれが」俺は小さな声で言った。

「ザ・レッドスターだって」健は言った。「夜だから、ライトが点いていたのか。騙された」

そういう健はどこか嬉しそうだった。そして、俺も同じ顔をしているだろうなと思った。

「はい、じゃあこの問題は？」

先生の声で教室が静まった。見ると、先生は健を指していた。目では俺も捉えている。

俺は申し訳なくなった。俺が話しかけたせいで健が指されたからだ。黒板を見ると短文を単語ごとに分解して並べ替えたものが並んでいた。

どうしたものかと隣を見ると健が手を挙げた。

真っ直ぐに手を挙げて、はい、と言った。

「はい、俺これ分かります」

「だから、あなたを指してるんだってば」先生は呆れたような声で言った。教室のあちこちから小さく笑い声が聞こえてきた。

「解けます。分かります」そう言いながら、健は立ち上がった。やけに自信に満ちた横顔を見ると、昨日の夜と同じような高揚感が胸の奥から湧いてきた。やってやれ、と俺は拳を握りながら笑っていた。

● 制作者より

今作は、ある中学生男子の特別でもなく、それでもほんの少しだけ何かを感じる夜を描いています。誰にも一度はそんな夜があったのではないかと思います。お供は、未成年ならジュースでもココアでもいいし、成人していればお酒でもいいでしょう。友人とどうでもいいこと語ったり、少しだけ真剣な顔をしてみたり、そういう時間が素敵だなどとは思いますが。そして、得てしてそういった時間は夜に訪れるのだと、私は思っています。

以前から書きたかった作品だったので、この場を借りて書くことが出来たことをうれしく思います。楽しんで読んで頂けることを願います。